

一人ひとりに固有な発達のプロセスを大切にする

～3歳児の人とのかかわりと心情面の発達に注視して～

3歳児 いちご組 担任 小早川 周子

はじめに

近年多くの子どもたちは、家庭や地域の中でいろいろな人との多様なかかわりが少ない生活をしていると指摘されている。本園に通う3歳児も、学級の88%が降園後自宅で兄弟（姉妹）や母親とのみ過ごし、近隣の異年齢の友だちと遊ぶ経験も少ないという実態である。

私たちは、保護者の願いや思いを受けとめながら保育の場でよりよい子どもの生活を創っていくために保護者を対象にアンケートを取らせていただいた。その項目の一つに、「本園の教育に望んでいる内容はどんなことですか」という設問があった。その結果では、3歳児学級の保護者の約半数において、異年齢の友だちも含め、いろいろな友だちや保育者とのふれあいを大切にしてほしい、という願いがあることが分かった。つまり、子どもが様々な人とふれあい、かかわっていく中で培う心情面の豊かさや、自分とは違う存在にふれることによって得られる新たな経験や学びを保護者は期待しているのではないかと捉えた。

参 考

設 問「本園の教育に望んでいる内容はどんなことですか」（対象：3歳児保護者）

回答結果・異年齢の友だちも含め、いろいろな友だちや保育者とのふれあい（47%）

- ・自由にのびのびと生活できること（35%）
- ・人への思いやりや命の大切さの認識（18%）

このような子どもたちの実態や保護者の願いを受けとめ、今年度私は保育の中で次のような3歳児の経験や生活を大切にしたいと考えた。

○さまざまな感情の体験

…一人ひとりに固有な感じ方や思いとしての自分らしさを素直に表わしてほしい。日々の生活の中で楽しい、嬉しいという心地よい感情だけでなく、悲しい、悔しい、嫌だというような感情もありのままに体験してほしい。

○人への信頼感につながる経験

…園で共に生活する人を知り、ふれあいを深めていく中で、いろいろな人にかかわってもらったり愛される喜びを味わい、人を好きになるという感情を数多く経験してほしい。

今年度私はこのような願いのもとに、3歳児が園で共に生活する人、つまり〈学級の友だち、異年齢の友だち、そして保育者を含め、共に生活している園の職員〉に対してどのよう

な心情を持ちながら受け入れ、自ら主体的にかかわっていくようになるのかという過程を一人ひとりに固有な発達のプロセスを大切にしながら追い、そこで見えてくる時期時期の必要な援助について考察してみたいと考え、次のような仮説を立てた。

○多様な人とのかかわりの中で、子どもがありのままの自分を表わしながら経験しているその過程を大切に、援助していけば、子どもは人への信頼感を深めながらより自分の存在感を見いだしていくであろう。

この仮説に迫るために、本稿では3歳児みなさんの1期～5期の記録をもとに考察していくことにする。

I 発 端（みなさんの入園当初の姿から）

いちご組は本年度4月に入園した男児10名、女児10名、計20名で編成されており、その中でみなさんは3月24日生まれ、学級の中で一番最後に3歳を迎えて入園してきた子どもである。両親と妹の4人家族で暮らしている。4月下旬まで園でもおむつをはいて生活しており、保護者にとっては入園当初、排泄の自立が最も大きな関心事だったように感じた。

身辺の自立という面からはまだまだ幼い面があり、また、自我の成長面で自己中心性も強いのだが、私はみなさんの姿に3歳児ならではの“固有な世界”を感じる事ができ、興味深く注視してきた。入園当初からみなさんにはみなさんの固有の感じ方、受けとめ方、表わし方というような固有な世界を感じる事ができた。初めての集団生活に対して母子分離を拒んだり、緊張した様子を見せる子どもが少なからずいる中で、みなさんは一見何の心配もないように自由で行動的な姿を見せた。しかし、そのような姿の裏にあるみなさんの内面を探っていくと、目に見える姿や行動だけでは判断を容易にはならないことに改めて気が付いた。

また、様々な場面でみなさんが自分なりのやり方で少しずつ周囲の人とつながり、そこで葛藤を繰り返しながらも固有な世界を少しずつ広げていくことについて関心を持った。以下このような点から、人とのかかわりの場面を中心にみなさんの心情面の様相とそこでの援助について分析、考察してみたい。

II 記録と考察

1. 1期（4月中旬～5月上旬）

＜この期のみなさんの姿＞ **自分の心が安定する居場所を模索する**

＜記録1＞

- 4/14 ふわふわと広範囲に行動し、何をしているのか全く把握できない。カバンや帽子が見えなくなることが多い。
- 4/20 ブランコやすべり台等、園庭の遊具を比較的短時間で転々と変えて遊ぶ。①や他の大人が名前を呼んでも応えず、ずっと場を変えていってしまう。10時過ぎ、正門から思わず飛び出そうとしていたみなさんを野津①が抱いて呼び止める。その

後、みなに対して個別に道路へは絶対に出てはいけないこと、心配したこと等を話し、学級での集まりで積み木の車と人形を使って道路への飛び出しをしないことや一人で帰ってはいけないこと等を指導する。

4 / 25 ㊦や7、8人の学級の友だちがいる砂場の一番外側に来てままと道具で一人遊びを始める。10時過ぎに正門の鍵をカチャカチャ回す。

4 / 28 ほぼ4月いっぱい毎日2、3回パンツのままおしっこをし、自分からはトイレに向かおうとしなかったが、この日初めてズボンの前を押さえるしぐさをしたため、㊦が促して一緒にトイレに行くことができる。

<考察1>

入園当初子どもたちは、初めての環境に対して緊張感や不安感を様々なかたちで表わしてくる。子どもたち一人ひとりの状態をしっかりと捉え、心情に寄り添いながら支えていくよう、母子分離についても柔軟な姿勢で対応していきたいと考えた。

そんな中みなは、当初から母子分離の困難もなくあっさりと母親と別れ、園内を一人で広範囲に転々と行動するといった姿が見られた。保育者が保育室周辺で生活しているとみなは行動は全く把握できないという状況であり、実際にかかわりが非常に薄い子どもであった。

一見とても自由で好奇心にあふれているように見えるみなだが、4月20日頃から毎日10時過ぎになると、黙って勢いよく正門に向かって飛び出していこうとすることが続いた。そのような時に追いかけて「みなちゃん！」と声をかけると更に逃げるように走っていったり、おやつに誘っても頑なに拒絶するという姿が見られるようになった。

この時初めて、この子は大丈夫だという自分自身の受けとめは安易だったと感じた。みなのように、朝の勢いのある気持ちが少し落ち着いた時間帯になってからふと自分が置かれた状況に焦りや不安の気持ちを持ち、そのような気持ちを様々な表わし方で示すということに改めて気付かされた。母子分離については、実際に母親と別れるその瞬間だけで語ることはできない、ということを実感した。

このようなみなに対して、10時前後の気持ちの揺れにより注視し、しっかり支えていこうと思った。学級の1期にあたる時期、みなはまだ自分の心を安定させる居場所となるもの(特定の遊び、特定の人、あるいは実際の場所といったもの)が見いだせず、なんとなく不安な気持ちを抱え、気持ちが安定する居場所をあれこれと模索していたと捉えている。

2. 2期(5月中旬～6月中旬)

<この期のみなの姿> **情緒が安定し、周りの人に対して目を向け、関心を寄せていく**

4月下旬から5月中旬にかけて子どもたちの情緒が安定していき、表情に柔らかさが出てきたり、行動にのびやかさを感じられるようになった。興味を持った遊びをあれこれとやっ

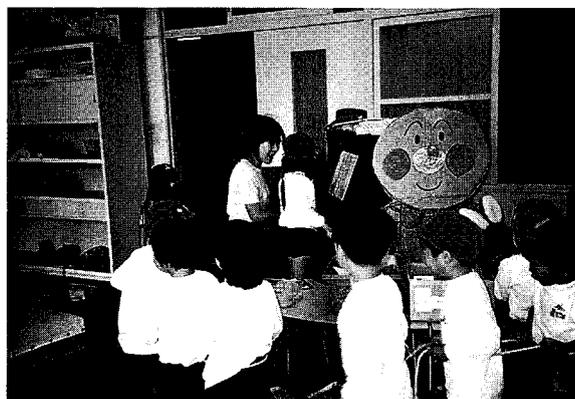
てみたり、自分が所属する学級が分かり、学級の友だちや保育者に少しずつ慣れて親しみを
持ち始めてきたことも感じられ、発達の2期に入ったことを捉えた。

そんな中、みなは園で生活する様々な人に対して1期とは全く異なる接し方をするよう
になった。かかわる人すべてにまるで無条件に信頼を置くかのように「おはよ、おはよ」と笑
顔を向け、よく笑い、全身で園生活の喜びを感じているような姿が感じられた。

<記録2>

5/11 遊戯室で年長ほし組の男児が乗るブロックカーの後ろに1人、チョココンと乗る。
その後、年中さくら組、たんぼぼ組の保育室に1人入り、「ぼくのミックスジュ
ース」のピアノに合わせて、年中児と一緒にピョンピョンはねて参加する。

5/15 ㊦がピアノで「さんぽ」を弾く
と、椅子を持ってきて、㊦の隣
で一緒にジャンジャン弾きなが
ら㊦の顔を見上げる。



5/16 登園してきた友だちを誰かれと
なく顔を下からのぞき込み、
「おはよ」「おはよ」と言ってま
わる。

5/29 欠席が続き、4日ぶりに登園。すぐにブランコやシーソーに乗る。「せんせ」
「せんせ」といろいろな場で何度も㊦の名前を呼び、㊦が「みーなーちゃん」
と語りかける。

5/30 ㊦と数人の子どもと一緒に飛行機ジムに乗ると、みなも後から乗ってくる。
みな 「サティ」

㊦ 「サティに行ってください」

みな 「せんせ」「せんせ」と㊦の後ろから笑って何度も声をかけ、㊦が応える。

<考察2>

この頃からみなと私との間では、「せんせ」「はーい、みーなーちゃん」というような、目
を合わせて呼応する単純なやりとりをよく楽しむようになった。不安定だからではなく、保
育者を確認することをまるで楽しみや喜びにしているように感じられ、このようなささやか
なつながりが温かく心地よいものとしてみなにしみ込んでいくよう、大切にした。この2期、
みなは園という環境に対して次のようなみな固有の心情を持ち始めたことと捉えた。

- 幼稚園という場を、自分の生活する場として認めるようになった。
- 自分が生活する場に共にいる人たちに対して、無条件に信頼を置くようになった。
- その人に興味を持つというより、人がしていること（状況）に関心を持っていた。そ

のため非常に興味が移りやすく、一時一時同じ場でその状況の中に共にいることを楽しんでいた。(人とのかかわりはまだ非常に断片的なため、葛藤や困難もあまり感じていないようであった。)

3. 3期(6月中旬～9月中旬)

〈この期のみなの姿〉 互いに行き違う思いを経験するーしんごとのかかわりの中でー

6月初旬から中旬にかけて、学級の子どもの動きや意識がおおまかに次のように変わってきたことを捉え、子どもたちが発達の3期に入ったと感じた。

- ・今までの遊びの経験の中で楽しさを覚えた場、気に入った場に再び行って遊ぼうとするようになった。
- ・ふとした遊びの場面で友だちと一緒にいたり、手をつないだりすることを喜ぶようになると共に、“○マークさんはこの人” “○マークの○ちゃん” という対応が少しずつできるようになったり、周りの友だちの行動が少しずつ気になるようになってきた。
- ・「せんせー」「せんせー見てー」と言って保育者を呼んだり、認めてもらおうとする姿や、「ブランコ押して」「絵本読んで」等と自分の要求を伝え、かかわりを求めようとする姿、ふとした瞬間に背中におぶさったり、手を触れたりして甘えたり親しみを表わす姿というように、それぞれがその子なりに保育者に対して親しみや安心感を表わすようになった。

この期の生活を通して、私は子どもに周囲の人へ次のような心情を培って行ってほしいと願った。

- ・友だちに対しては、友だちの中に入って遊ぶことや特定の友だちを作ることを早急に求めず、偶然の出会いの場を通して、いろいろな友だちとのふとしたふれあいを嬉しく思ったり、楽しく感じたりする経験を少しずつ積み重ねて行ってほしい。
- ・保育者に対しては、自分の気持ちを我慢したりせずしっかりと自己主張したり、甘えたり頼ったりすることができるようになってほしい。

〈記録3〉

6/23 すずこが1人、椅子ブランコに乗っていると、みなが突然飛び乗る。

みな 「こわい？」

すずこ 「ううん」

みな 「おねーちゃん(自分自身のこと)こわい。こわいねー！(すずこに同意を求めるように言う)キャハハ」

みな、ブランコの揺れに合わせて「んーだあー、んーだあー…」と言い、機嫌よく乗っている。

7/14 みなとやすひこがシーソーと一緒に乗る。やすひこの方がうまく蹴り上げるの

でみなはそれに任せている。傍につよしと㊦が立っている。

つよし 「飛行機だー」

やすひこ 「飛行機だー、せんせ (㊦を見て空を指さす)」

みな 「飛行機だー。おととと (嬉しそうに笑う)」

やすひこ 「おとおとと、飛行機飛んでった、バイバーイ」

みな 「バイバイ。よいしょ (笑う)」

やすひこ 「よいしょ」

みな 「ほら見て (㊦を見て、認めてもらおうとするような表情をする)」

やすひこ 「ほら見て」

㊦ 「ほら見たよー (みなとやすひこを見て笑みを返す)」

<考察3>

この時期、みなは周りの友だちのすることに対してより関心を持ち、自ら傍に行って「じっと見る」という行為をよくするようになった。同じ場にいながらそれぞれが一人遊びをしているという状況の中でも、一時ふっと見上げて隣の友だちのすることをじっと見る、そしてまた自分の遊びへと向かっていくという姿が繰り返し見られるようになった。少し気持ちを許した学級の友だちに対しては、相手に同意を求めるように声をかけたり、相手の言葉をそのまま反復していく姿も見られた。周りの子どもも同様に、友だちに同意したり、友だちとおんなじという気持ちを持つことに喜びを感じていたと受けとめている。

しかしこの時期、いろいろな学級の友だちがいる中で特にみなとしんごとのかかわりにおいて、互いの個性や発達の特性の違いによって様々な状況や課題が生まれてきた。そのことによりみな自身が戸惑う姿がよく見られるようになり、私自身も2人に対してどのように援助したらよいのか迷った。



<記録4>

7/14 ブランコに乗って遊んでいるみなの前に、しんごがやって来る。

しんご 「行ってみよ」とみなをテラスの水遊びに誘う。

みな 「やだ」

しんご 「あとでお散歩しよ、あとでね」みなは反応はない。

みな 「ここー、せんせ、見てー (㊦を見る)」

しんご 「ぼくに (が) 押してあげてんの」と㊦に向かって言う。

「てっつないで、お散歩しよ」

みな 「やだ」

しんご 「なんで？ なんで？ なんで？ …なんで嫌いなの一？お散歩好き？」

みな 「うん、好き」

しんご 「じゃ、お散歩行こうよ」

みな 「やだ、や」

しんご 「なんで？」→みなは逃げるようにアスレチックの遊具へ移動する。

しんごは下から見上げる。

(しんごは高い所が苦手なため、上がっていかない)

しんご 「ね、ね、ね、みなちゃん、これ渡ってお散歩しよ（下の方にある丸太を指さす）」

しんたろうがアスレチックに登ってくる。

みな 「あああ（しんたろうを見て嬉しそうに笑う）」

しんご 「ねー降りようか、降りる？」

みな 「おーいせんせー、おーい（①を見て笑う）」

しんご 「ちょっとだけ、ちょっとだけだから」 以後省略

<考察4>

この場面ではしんごが「ねねね、みなちゃんお散歩しよ」と言ってみなを誘うのだが、みなは興味がなく「やだ、や」と何回も拒否をしている。しかしその都度しんごが「あとでしよ、あとでね」「なんで、なんで嫌いなの一」「ちょっとだけ、ちょっとだけだから」と言って追い、みなのかかわりを強く求めている。みなはそのようなしんごに対して明らかに拒否をしているが、一方では「おーいせんせー、見てー」と言って私とのかかわりをあっけらかんとした表情で求める姿も見せている。

私はこの時期、みなが求める心情としんごのみなに対するかかわり方は質が非常に違うように受けとめた。みなは、みな自由さを束縛しないふとした友だちとのふれあいや、何よりも保育者との1対1のかかわりが楽しいと感じ、求めている。それに対してしんごは、みなとの関係を密着させることで心を安定させようとしていたのではないかと捉えている。実際にこの時期しんごは、入園当初のはりきり感や緊張感が取れ、母親と離れたくないという思いも素直に表わすようになっていた。また、気を張って母親と別れても情緒が不安定なままのことが多かった。

そのようにみな意識としんごの意識は明らかに異なり、それを近付けるような手だてよりもしんごの不安定さを私との1対1の関係を確かにすることでもっと解消するよう努めることが必要であったと思う。しかしこの時私は、互いにとってこのような行き違いも経験することはむしろ意味があることかもしれない、と考えており、やや楽観的な気持ちで2人の

傍で見守ることが多かった。なぜならば、この時しんごをもっと別な関心へと無理に向けさせたとしてもそのことでみなを強く求める気持ちはなくなるかどうか、むしろより不安定な状態になっていくのではないか、という気持ちもあったからである。

4. 4期（9月中旬～12月中旬）

＜この期のみなの姿＞ **少しずつ自分の主体性を表わしながら自分に合う友だちを見つけようとする**

みなとしんごとの関係には、9月中旬から少しずつ変化が見られるようになった。しんごは前庭の自転車乗りという気に入った遊びがみつきり、毎日朝から夢中になってそれで遊ぶ姿が見られ、表情や行動も幾分落ち着きが感じられるようになった。またみなの方は、しんごに対して好意的に穏やかにかかわる時があれば、その時の興味に合わなければさらりとかわすというような余裕も感じられるようになった。そしてみなは、新しい友だち、ちょっとした共通の関心から笑い合ったり、追いかけて合ったりして喜びを共有できる友だちとのかわりを次第に自ら求めるようになった。このことは、みなが自分の興味や関心、願いを求めて友だちを見つけ、近付いていこうとする姿であり、友だちの中で少しずつ自分の主体性を表わすようになったと言えるのではないかと考えた。実際にみなが特に喜んで接する相手としてはしんたろう、えりか、まさとであったが、この友だちはみなにとって次のような心情を持つことができる友だちであったと捉えている。

- みなに対してそれほど固執しない自由さがある友だち。そのような相手と接するとみなも自由に動け、楽しい気分につながるようである。
- 相手とかかわる手段は言葉でのやりとりだけではなく、言葉を使わなくても気持ちが合うといった友だち。興味が転々と移りゆき、それに伴って自然に体が動いていくというみな歩調と似ている友だちや、追いかけて走り回ったりするだけで楽しさを共有できるような友だち。
- 一方的に相手が自分の思いや考えを要求したりするのではなく、自分の応えに対しても受け入れようとするような姿を見せる友だち。

＜記録5＞

10/3 まさととみなが「ここまでおーいで」と追いかけてっこをしている。
まさとが広告紙のピストルを持ち、「バーンバーン」とポーズを取ると、みなも指で「バーンバーン」と呼応する。そのような2人をしんごが後ろから追いかける。

しんご 「遊戯室行こ、みんなで行こ…」みなは振り返らずに走り続ける。

（みなとつながりたいというしんごの思いが思うように届かないので、①も

加わる。)

①「ここまでおいで」→みな、まさとの中に更に2人の友だちが加わり、①と追いかけてこが始まる。

しんごは勢いよく後ろからみなを抱きしめる。→みな「やだ、おまえはやーだよ」

まさと 「バンバン、ここまでおいで」→みな「ここまでおいで」

まさと 「やだよー」→しんご「やだよー、ここまでおいでー」

まさと 「もうやめよ」→みな「もうやめよ」→しんご「疲れた」

まさと 「やだよ」→しんご「やだよ」

みな 「ここまでおいで」→しんご「ここまでおいで」

まさと 「あるこ」→みなは①に対して「あるこうした、見てー」まさとは自然にみなの手をとる。

しんご 「今度はね、僕が隠れた所に行くんだよー、ワ〜！」1人勢いよく草むらに走るが、誰もついてこない。しんごはみなに何やらないしょ話をする。

→みな 「ウキヤー！」と喜ぶ。

①「ここまでおいで、しんちゃん」→しんご「ウワー！」と喜ぶ。

①「ここまでおいで、みなちゃんも」

→しんご、みな、他の2人の友だちが再び①のふところに飛び込んでくる。

①「みんないっしょにつーかまえた」

<考察5>

この場面ではみなとまさとが2人で追いかけてこをしている所へしんごがやって来るのだが、みなはいつになく激しい口調で「やだ、おまえはやーだよ」と言って拒否をする。しんごのみなを求める気持ちがなかなか思うように届かないので、私もその追いかけてこに加わり、お互いの気持ちを解きほぐしていきたいと考えた場面である。この場面では、みなとしんごの真向かう関係をまさとらとを交えることで少し柔軟にしていくことや、子ども同士をつないでいくという援助も必要ではないかと考えた。しかし、教育実習生がこの数分前の姿を記録していたことにより、私の援助や2人への捉えについて振り返ってみることができた。

<記録6；実習生の記録より>

10/3 朝、前庭でみな、しんご、やすひこらが自転車で遊んでいる。途中でやすひこが自転車をふと降りた後、その自転車をみなが乗る。

しんご 「これ、やすくんの！」しんごはすかさず無理やりにみなを降ろそうとする。

みな 「いや、いや」みなは抵抗するが、しんごはみなを腕をつかみ、ついに

は腕を噛んでしまう。みなはびっくりして大泣きをする。やすひこはその傍でじっと順番を待っているような様子である。みなはそれでも降りようとしなかったため、しんごは更に引っ張り、自転車ごとみなが倒れてしまう。やすひこが倒れた自転車に乗ろうとすると、みなは泣きながらも乗ろうとし、そのままこいで行ってしまう。やすひこはその場で泣く。

近くにいた岡崎①が泣いていたやすひこを連れてみなの所に行き、「やすくん、涙が出たよ」と言う。しばらくしてやすひこは涙を拭き、違う自転車に自分から乗る。

その後みなはしんごか近付いてきただけで泣きそうになったり、「あっちいっとな、おまえ」とつぶやく等、激しい言葉が出たりする。しんごが再び「これやすくんの！」と言ってみなを降ろそうとしたので、実習生が「もうやすくん、新しい自転車乗ってるよ」と言う。するとしんごは自分の自転車に乗り、「ほら！僕、運転が上手でしょ」と実習生に向かって言う。

みなはやすひこに「バイバーイ」と手を振ると、やすひこも「バイバーイ」と言って応える。

その後、みなは一人で園庭の遊具を転々とする。やすひこはりかを自転車の後ろに乗せてスピードを出して前庭を何周も走る。りかは「はやい、やすくん！」と言ひ、やすひこも嬉しそうな表情をする。

園庭から一人戻って来たみなに対してまさとが「乗っていいよー」と声をかけたため、まさととみなが二人乗りをする。その二人をしんごは見て「ちからづよいねー」と声をかける。しばらくしてしんごはみなに「遊戯室行こー。」と誘うが、みなはしんごを避けるようにしてまさとの近くに寄る。

→〈記録5〉の場面へ

〈考察6〉

この記録からは、この日何故みながまさとに魅かれていったのか、何故しんごに対して普段とは違うやや激しい口調を向けたのか、そしてしんごのみなに対する強くまっすぐな思いについて分かる気持ちがあった。しんごはみなへの好意と共に強い正義感を持って一生懸命に思いを伝えようとするが、かえってそのことがみなにとって負担になったり、しんごへの恐れにつながったりしてしまうようである。みな自身も周りの友だちの思いに心を傾けるよりも、その時その場での自分の思いを優先してしまうという面が強いが、そのようなみなであってもしんごの手を振りほどいて去った後は一人で園庭を転々と歩き、気持ちを落ち着かせるようにしている。このことはみな自身の心の成長とも取れる。そのみなを気持ち回復させてくれたのがまさとの一言であったと思われる。

この記録と自分自身の援助をつなげてみると、しんごにとってはみなとのかかわりを今一つ不消化に終わらせてしまったのではないかという思いが残った。それぞれの主張のぶつかり合いや葛藤を経験しながら少しずつ相手への理解につなげていくことは非常に大切なことであると考えているが、この時の2人のように互いに相手を理解しづらい面ばかりが重なっていくと、次第に相手のよさも感じられなくなってくるのではないかと思う。保育者の確かな目、判断力を持って適時にふさわしい援助に努めていくということについての難しさを改めて気付かせられた。

4期に入るとみなは他学級の保育者や事務員さんとも親しく声を交わす姿が増えてきた。目を合わせ、笑顔を向け合って「またねー」「ばいばーい」と言って手を振り、それぞれが別れていくというようないっときのふれあいではあるが、みなにとっては同じ園で生活しているいろいろな大人から愛されているという喜びを感じていたに違いない。またやはりこの期になると、異年齢の友だちに対しても関心が広がり、周りの人に向ける視野が広がって来ていることが感じられた。

<記録7>

9/26 回旋塔に年長のゆきこ、まい、あいこが乗り、その中にみなも一人入り、うつむいて座っている。隣に座っているまいがみな顔を下から見上げ、気を遣って声をかけているようであるが、みなは下を向き、押し黙っている。

まい「うちんと遊びたい？」みなは黙ってうなづく。

㊦が側に行くと、まいが㊦に「うちんと遊びたいって聞いたら遊びたいって言ったよ」と言う。みなはぼんやり遠くを見るような表情をする。

㊦「みなちゃん、お姉ちゃんと遊びたいねー」みなは㊦に体を寄せるようにして黙る。

㊦「ほし組のゆきこちゃんだよ。安藤先生のほし組」

結局みなはその場から去り、自転車に乗る。「見てー、ほら」「ブーして」と㊦に要求する。するとたんぼ組のまりが近寄って来る。

まり「何してんの？」みなは黙る。

まり「自転車遊び？」みなはうなづく。

まりは去り、みなは再び自転車をこぐ。

<考察7>

この記録7と同じような場面がよく見られるようになった。年長児が楽しそうに集って遊んでいる場に関心を持って近寄っていくことはできるが、どのように行動したら仲間入りができるかという方法までは分からず、また、年長児から働きかけられてもどのように応えたらよいか分からない様子であった。しかしYES、NOの意思表示はうなづくで表わそ

うとしていた。年長児からの働きかけにも相手を避けたり、怖がったりするような様子は見せないで、この時期には年長児に対しても共に生活する仲間として親しみの気持ちは持ちつつあったのではないかと感じた。

特に3歳児と異年齢の子どもが接する時、子どもと子どもの気持ちをさりげなくつないでいくという援助も大切なことであるが、それ以上に保育者が同じ場で互いに異なる経験をしていることに対してどのような価値づけをし、受けとめているかというまなざしが最も大切なことではないかと考えている。保育者も共に3歳児の素直な興味関心に寄り添って見たり、一緒に参加したりしながら子どもが年長児の遊びに新鮮な驚きや憧れという心情を持ち、ためこんでいくこと、年長児からの言葉や教えに耳を傾けたり、素直に従おうとするようなことも3歳児の大切な学びの経験であると思う。このことによってより豊かな心情面の発達へとつながっていくのではないかと考えている。

5. 5期（1月下旬～）

<この期のみなの姿>

互いに求め合い、呼応し合い、気持ちを受けとめ合っている新たな出会いへ

11月、12月と、みなとしんごは互いにいろいろな友だちと対のかかわりを楽しみ、いろいろな持ち味にふれながら経験を重ねてきた。この時期、2人の直接的なかかわりは以前のように見られなくなり、関係は途絶えてしまったのだろうかと思っていたが、1月18日から不思議なことにまたこの2人の新たなかかわりの姿が見られるようになった。

「おはよー、しんちゃんおはよー」毎朝相手の登園を待ち、みなとしんごは出会えた喜びをピョンピョンはねたり、手をつないだりして喜び合う。そして毎日同じ場で粘土遊びをして私や他学級の保育者に「ごはん食べてくださーい。」等と言って勤めに歩いていた。

学級全体としても、この期になると2、3人の気の合う友だちと集まったり誘い合ったりしながら遊ぼうとする姿や、ふとした瞬間にいろいろな友だちが次第に寄り集まってきて数人で遊びや場を共有する姿が見られることが多くなった。そのような場面では、学級の友だちの様子に目を留め、自分なりに友だちの気持ちを思いやろうとしたり、その子らしいやり方で優しさを示そうとする姿も見られることもあった。

記録8からは、みなが学級の友だちの遊びに心魅かれながらも拒否されてしまい、悲しさを味わうが、そのみなの姿を見てかかわりを変えていこうとする友だちの姿や、しんごがしんごなりのやり方でさりげなくみなの心に寄り添い、優しさを示す姿が感じられる。

<記録8>

2/13 降園前、かずひろ、つよし、やすひこが一緒にカラー積み木を並べたり、重ねたりしている。側を通った①にかずひろが「ねージェット作ってる」と言う。

①が「いいなー。ちょっと乗せ

てもらおうかな」と言うのと、かずひろとつよしが「いいよー」と言う。すると数人の男児も次々に乗り込んでくる。かずひろらは黙って受け入れている。そのにぎわいに魅かれて廊下からみながやって来て近くでじっとみる。しかし、かずひろがそのみ



なを見て「ダメーダメー」と言ったことからつよし、やすひこも「ダメーダメー」と繰り返す。みなはその場で大泣きをして泣きやまない。そのようなみなを見

てからかずひろが「ここおいで、ここ」と声をかける。みなは泣きながらゆっくりと歩き出し、ジェットの後ろ側に寄り、しんごの隣に座る。①が「みなちゃんよかったね。」と声をかけると、しんごはおいでと言うかのようにみなを座る位置を手のひらで黙って示す。かずひろ、つよしらは何事もなかったかのように「ブーン、出発しまーす」と言う。みなは泣きやみ、隣のしんごと顔を見合わせ、「しんちゃんねー、楽しかったがー。おねーちゃん（自分自身のこと）のプレゼント…」等と会話をす



(この日、みなとしんごは朝から自転車やブランコと一緒に遊んでいた。)

<考察 8>

この期の生活では最終期として、友だちと友だちとのつながりやいちご組としての仲間意識を育みながら生活して行ってほしいと願い、援助に努めた。

この期はみなと特定の友だちしんごとのかかわりの内容が大きく変化した時期であった。2人がいろいろな人とのふれあいを共に求め、行く先々で自分たちを受けとめ、認めてもらう喜びを共有し合うこと、それは2人にとって初めての経験であった。一方が発した言葉や

動作を瞬間でもう一方が真似をし、どちらが先に働きかけたのかが分からないぐらいに互いに結びつこうとしているように見えた。2人にとってもこの期は、互いに求め合い、断片的ではあるが呼応し合い、気持ちを受けとめ合っている、そのような友だちとのかかわり方の節目となる時期にさしかかったのではないかと捉えている。自己中心性の強かったみなにとって6月中旬からしんごという友だちとふれてきたことは、この期の発達に大いにつながったと受けとめている。

Ⅲ まとめと今後の課題

1. 基本的な信頼感（一人ひとりと保育者との心のつながり）を培う3歳児の生活

入園当初、母親との別れを泣いて拒んだり、緊張感で立ちつくしてしまうような目に見えるかたちでは不安感を表わさなかったみな。広範囲に転々と場を探索し、目に留まったものに一時触れてはまた転々と行動するといった姿が見られることが多かった。また、私が「みなちゃん」と声をかけてもなかなか視線が合わず、明らかな返答もないことが多かった。この時期は、新しい世界を自分の中に受け入れるまでのみななりの心の準備期間であったと思う。身の自立や言葉の発達の面等、まだ非常に幼い印象が強かったみなであったが、私はみな3歳児ならではの固有な世界を日々感じ、わがままやこだわりといったものも含めてみなの世界をおもしろいなあという思いで見つめてきた。自己中心性が強い一方で、周りの人に慣れると相手に非常に親しみの気持ちを持ち、自分にかかわる人を絶対的に信じているという気持ちすら感じさせるような愛着の態度も見られた。

そのようなみな各期の発達の様相を示しながらいろいろな友だちの持ち味にふれ、喜びや楽しさを経験してきたと同時に、友だちとの思いの違いやぶつかり合いから泣いたり、相手を怖がったりする経験もした。そのように初めての集団生活に飛び込んできた子どもたちにとっては、保育者の存在は非常に大きな意味を持ち、子どもの生活の安定感につながっていることを感じた。

この時期何よりも一人ひとりと保育者との心のつながりを確かにしていくこと、子どもの心情的な面において保育者が子どもの基地となっていくこと、そのことを保育者の独りよがりではなく子ども自身がそのように受けとめているということが重要であることを改めて感じた。

2. 長いスパンの中で友だちに対する見方や接し方を少しずつ変えていく子どもたち

みなは3期から特定の友だちしんごとの出会いの中で、自分のやりたいこととしんごの求めていることの違い等から、困惑という感情や思わず噛まれた時の痛さと共に恐れという感情も体験した。そのような2人の葛藤の時期にそれぞれの気持ちを向かい合わせていくというより、みなと対保育者との関係でみなをしたいことやみなの思いを受けとめること、またしんごと対保育者との関係でしんごのみなを思う気持ちやもやもやとした気持ち

をしっかりと汲み、自分の気持ちを立て直して再び遊びに向かっていけるよう時間をかけて見守っていく援助に心がけていった。そして2人の姿を通して、自分の気持ちをおさめたり気持ちを切り替えていくまでにはその子はその子なりの時間や空間が必要であり、そのことは表面的な保育者の解決よりも子どもにとっては大切なものであるということを感じた。

みなは自分とは違うしんごという個性にふれながら、時には「やだ、や」と拒否をしてしんごから逃げたり、自分の歩調に合うような友だちを自らみつけ出そうとし、新たな友だちとのかかわりを求めるようになった。つまり、子どもは自分とは違う個性にふれていくことで、より自分の思いを確かにし、主体性や自我といったものをより強く表わしていきこうとするのではないかと思う。

そのような2人が4期に入ると、お互いに対する接し方を少しずつ変えていくようになった。みなはしんごに対して好意的に穏やかにかかわる時もあれば、その時の自分の興味に合わなければ「やーだよー」とけろりとかわす姿も見られるようになった。しんごの方もみなに対する好意は変わらないものの、自分の思いを何が何でも押し通すという行動が少なくなり、相手の様子を見たりしながら自分のアプローチの仕方を多少加減しているような姿が感じられた。

その後およそ2か月間、みなとしんごの直接的なかかわりがあまり見られなくなる期間があった。この間、2人は互いに違う友だちと対のかかわりを楽しんでいた。それぞれに自分の歩調に合い、安心して自分を表わしたり相手のことを受けとめたりすることができる友だちを探していたのではないかと思う。援助としても、2人が素直に感じている喜びや楽しさに心から共感し、嬉しいね、楽しいねと語りかけることが多かったように思う。また、2人が日に日に張りきった様子で、心も体も開放したように生活していることが感じられた。

そのような過程を経て、1月18日より再び2人が新たな出会いをつくっていった。一日のうちの時々互いに素直に求め合い、呼応していく姿からは、相手の言葉や態度をしっかりと聞いたり見たりし、受けとめようとしているという育ちが感じられた。このような育ちにつながった要因として、それぞれが互いに違う友だちと共にしっかりと遊び込み、



いろいろな場で自分が受け入れられているという安心感や充ち足りた気持ちを持ったことが大きいのではないかと思う。

かつての長い葛藤の経験を越え、相手の気持ちを余裕を持って受けとめようとしたり、相手に対して親しみの気持ちを強くしていく2人の姿。3歳児は自分の気持ちをありのまま

まに相手にぶつけること、お互いの気持ちが思うように通じ合わない過程、直接的なかわりが薄れる期間も経ながら、長いスパンの中で友だちに対する見方や接し方を少しずつ変えていくのだということを実感した。

3. 一人ひとりに固有な発達のプロセスがあり、それを大切にしながら長期的に育ちの見通しを持って援助していくことの必要性

入園当初みなは、新しい環境へ飛び込む不安感を園内を転々と行動することで表わしていたが、少しずつ自分の周りにいる保育者や友だちに親しみや愛着を持ち、それを素直に表現するようになった。

2期になるといろいろな友だちのすることをじっと見たり、言葉や動きをそっくり模倣したり、「おねえちゃんも〇〇したい」「おねえちゃんね…」等と言って自分もおんなじだという気持ちを保育者に自信を持って表わそうとしていた。

3期から4期にかけて1対1のかかわりを楽しむ友だちを少しずつ広げてきたが、中には求める心情が互いに違ったために長い期間葛藤の気持ちを共に味わった友だちもいた。今までどちらかという愛他的な気持ちや行動が多かったみなは、友だちの行為に対して嫌だ、怖い、あるいはよく分からないというような気持ちを味わい、時には相手に対して強く激しい口調を向ける姿も見られるようになった。

そのみなは11月、12月、他の友だちとのふれあいを十分に楽しんだことを述べたが、同時にこの頃はみなが精神的な面において大きな節目を迎えている時期ではないかと捉えていた。その頃から、今まで素直に耳を傾けたり促されてもしようとしていた生活習慣の面等で、「やだやだ」と言って母親や私の顔色をまるで喜んで見ているかのようにしようとしなくなったり、人に任せて逃げてみたりするような姿が増えてきた。今まで身近な大人に対してはどちらかと言うと素直で聞き分けがよいという姿が多かったみなは、この時期何か精神的な面においても大きく成長しようとしていたのではなかったか、他とおんなじでない自分というものをみなが見だし、表わそうとしていた時期ではなかったかと振り返っている。

5期に入ると、今まで葛藤の気持ちを味わったり直接的なかわりが薄れた時期もあった特定の友だち、しんごと互いに心穏やかに求め合い、呼応し合っていく新たな出会いが生まれるようになった。もちろん、このような姿ばかりが見られるのではなく、この特定の友だちに限らずいろいろな友だちと思いの主張をし、けんかをして気持ちが沈んだりすることもあった。しかし、この時期学級全体の育ちとして、友だち同士と安心して自分を表わし、気持ちをふれ合わせていくという心地よく穏やかな雰囲気の中で、みなも安心して過ごすことができたのではないかと思う。

このようなプロセスはみな固有な発達のプロセスであり、学級のその他の子どもにもその子なりの発達のプロセスがあり、それらを捉えながら援助を探っていくことは改めて

非常に大切なことであると受けとめた。このように援助したからすぐにこう変わった、育ったという結果ではなく、おそらくこのような育ちに向けて今の経験がどう結びついていくかということの一つ一つ確かめながら長期的な見通しを持って支えていく姿勢が必要ではないかと感じている。

3歳児みなさんの固有の発達のプロセスを大切にしながら、主に人とのかかわりと心情面の発達に焦点をあてて考察をしてきた。みなさんのプロセスを追っていくと人との信頼感をベースにし、個の世界から次第に特定の友だち、学級のいろいろな友だち、異年齢の友だち、共に生活する周囲の大人に対して関心が注がれ、つながりを意識するようになってきたことが感じられた。その中で特に6月中旬以降のしんごとのかかわりからは、みなさんが自分は今何がしたいか、何がしたくないかと自分の思いを確かに行うことができ、自分自身を見いだしていくことにつながったと捉えている。記録8のように、しんごとの心のつながりが確かになると、トラブルの場面でみなさんはしんごとのつながりが自分を支える拠り所にもなった。

互いにありのままの自分を表わしていくその過程から、子どもは友だちへの信頼感を培っていくのではないだろうか。また子どもは、保育者はもちろんのこと周囲の友だちや他の大人に自分の気持ちを素直に表わすことができたり、自分を大切にされる喜びや人と心を通わす心地よさを味わう快の感情をためこむことによって、更にいろいろな人とかかわりを広げていこうとするのではないだろうか。

仮説の中の、子どもが人への信頼感を深めていくことによって、より自分の存在感を見いだしていくという点については、十分に分析、考察ができなかったため、今後は更に、一人ひとりが学級の中で自分の存在感をしっかりと見いだしていくことができるための経験や必要な援助について探っていきたいと思う。